

全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態

尾崎 喜光[※]

On Non-initial Velar Nasal [ŋ] in Japanese

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

日本語のガ行子音には [g] と [ŋ] の 2 種があることはよく知られている^(注1)。東京を中心とする首都圏の言葉を基盤とする共通語においては、結合の度合いがゆるい複合語の後部要素の先頭や「ゴロゴロ」のような繰り返しを伴う擬音語・擬態語の後部要素の先頭などを除く単純語等の非語頭のガ行子音は [ŋ] で発音される(たとえば「鏡」のガや「小学校」のガの子音)。これに対し語頭のガ行子音は [g] で発音され(たとえば「学校」のガ)、これらの音は基本的に相補分布をなしている。和語は語頭にガ行音が立たないため、語頭の [g] は結局漢語・外来語に限られる。これに対し非語頭に現れうる [ŋ] は、和語(「大釜」のような連濁によりガ行となる複合語後部要素の和語も含む)ないしは結合の度合いが強くほとんど一語化している漢語複合語の後部要素(たとえば「音楽」のガ)等が中心となる。

語頭の [g] はほぼ全国的に行われており、時代による変化もほとんどなく安定している。これに対し、「鼻濁音」ないしは「ガ行鼻音」と呼ばれる非語頭の [ŋ] は全国的に分布しているわけではなく、[g] で発音する地域も少なからず存在し、以前から地域差が認められている。また、[ŋ] を使う地域であっても年齢差が顕著に認められる地域が全国各地にあり、[ŋ] の使用者率は若年層になるほど減少することから、[ŋ] が衰退しつつあることが推測される地域も少なくない。つまり、非語頭の [ŋ] は安定した状態ではなく [g] と対立しつつ存在しており、地域差や、年齢差から推測される変化(衰退)が認められるのである。さらに言えば、[ŋ] から [g] への変化が進行しつつある地域、すなわち [ŋ] と [g] が共存している地域では、非語頭のガ行音の前後の音環境や語種、品詞の違いにより、あるいは複合語の場合は結合の度合いの違いにより、さらには発音への意識の度合いが異なる発話スタイルの違いにより、[ŋ] と [g] のいずれが現われるかに傾向的な違いがあることが種々の先行研究により明らかにされている。

こうした背景があり、非語頭のガ行子音をめぐっては、地域差の実態や、地理的対立として現われる両音の歴史的関係の解明をめざす研究、あるいは [ŋ] から [g] への最近

キーワード：ガ行鼻音、鼻濁音、音声の言語変化

Key Words : Japanese Velar Nasal, large number research, linguistic change

※ 本学文学部日本語日本文学科

の変化の実態を把握しその要因を解明しようとする研究が数多くなされてきた。

こうした研究の流れを受けて本稿では、研究経費や調査規模の制約から従来実施が困難であった全国を対象とした多人数調査から、地理的分布というよりも国民の割合として見た場合、現在 [ŋ] を使っている人はどれくらいいるのか、また全国の回答者を年齢層別に分析した場合どのような年齢差（およびそこから読み取れる言語変化）が認められるのかという点について、さらには [ŋ] の衰退がそれほど顕著に認められない地域にはどのような要因が働いているのかという点を中心に論じる。

全国を対象とした調査には、その土地生え抜きの高年層のみを対象とした言語地理学的調査はあっても、移住者をも含む国民全体を母集団として想定し、そこから実際の回答者を無作為に多人数抽出して調査する計量社会言語学的調査はこれまでなかった。一方、[ŋ] を持つ地域において多人数を対象とした計量社会言語学的調査では、特定の地域（多くの場合は特定の市や町）のみを対象とすることがほとんどであった。回答者も、調査の実現可能性という制約から、大学生等を中心とする若年層のみであったり、抽出方法もたとえば研究者が担当する授業の受講者というような無作為抽出ではなく回答が得られやすい人である場合が少なくなかった（回答者は誰でもかまわないという点ではある意味無作為であるが、抽出される可能性を母集団全員が等しく持っているわけではないという点では無作為ではない）。そもそも母集団が明確に意識されていると思われない調査も少なくない。本稿では、「全国」から「無作為」に抽出された多人数の音声进行分析することで、[ŋ] を持っている国民の割合が現在数値的にどうであるのかということを中心に、従来なかった角度からガ行子音の実態にせまる。

本稿で示す全国調査では、ガ行子音だけでなく、現在動態を示すと考えられる表現を中心にさまざまな項目を調査した。そのため、ガ行子音に関する調査項目は、本来は別の事象の把握を目的とするがガ行子音についても把握した調査項目を含めても5項目にとどめざるをえなかった。従って、たとえば直前・直後の音が [g] や [ŋ] の出現をどのようにならないしはどの程度規定するかといった言語内的条件からの分析は困難である。そこで本稿では、回答者の年齢層や居住地域といった言語外的条件からの分析を中心に行なう。

なお、直後にカ行音・ガ行音を伴う撥音も [ŋ] で発音される（たとえば「参加」のンや「音楽」のン）。撥音以外の非語頭のガ行子音と異なり [ŋ] は義務的に生じるが、この [ŋ] はここでの議論の対象としない。

2. [ŋ] の地理的分布

全国多人数調査の結果を示すのに先立ち、非語頭のガ行子音がどう発音されているのかについて言語地理学的観点から全国を調査した結果を確認しておこう。

国立国語研究所は昭和30年代に、全国の約2,400地点において、その土地生え抜きの高年層男性を対象に言語地理学的調査を行っている。調査項目は約300あるが、1項目1枚の言語地図としてまとめた『日本言語地図』（全6集）として調査結果が示されている。この調査項目の中に、非語頭のガ行子音を見るための項目として「鏡」と「陰」が用意されている。調査結果の地図はいずれも第1集（国立国語研究所1966）に収められている。調査は個別面接法で行われたが、音声を見る項目は「なぞなぞ式」で回答を求め、その回答語形に現れる音声を調査員が記録している。たとえば「鏡」は、男性の上半身とその影

が鏡に映った絵を示しながら、「顔をうつすための、こういうものを何と言いますか」と質問することで「かがみ」と発音させ、そのときの「ガ」の発音を記録している。

真田信治（1979）は『日本言語地図』の「鏡」を簡略化した地図を示している。図1はそれを引用したものである。

地図中■で示されているのが [ŋ] の地点である。今から半世紀前の昭和30年代の高年層では、中国・九州地方や四国の瀬戸内側は [ŋ] ではなく [g] の地域であり、[ŋ]

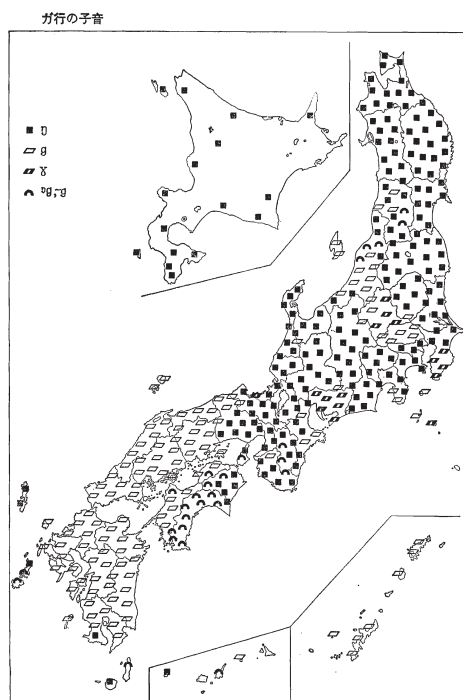


図1 「鏡」のガの子音

は全国的でないことが確認される。東日本にも [g] を用いる地域が見られる。分布が比較的広く連続しているところとしては、新潟県・群馬県・埼玉県がある。東京都を挟んで千葉県房総半島に分布する [ɣ] も、鼻音ではない点からすると [g] の変異であり、先の地域の連続と考えられる。この他、愛知県や三重県にも、[g] なしは [ɣ] の分布が見られる。

このように、大きく見ると、[ŋ] を持っている近畿地方を含む東日本対、それを持っていない西日本という東西の対立となる。ただし、先に述べたように、東日本の中にも比較的広域で [ŋ] を持っていない地域も分布している。

なお、高知県等に分布する入り渡り鼻音を伴う [˜g] は歴史的観点から注目されるが、本稿では現代の動態を論じることから、[˜g] が分布していることの確認のみにとどめる。

3. 全国多人数調査から見る現在のガ行鼻音

約半世紀前と少し古い情報であるが、全国の地理的分布は以上のとおりである。では、使用者の比率という観点から現在の全国の状況を見るとどのようであろうか。筆者が企画・実施にたずさわった全国多人数調査の結果からそれを見てみよう。

3.1. 調査概要

調査は国立国語研究所が2009年3月に実施した^(註2)。調査の企画・実施は、当時所員であった筆者が主担当者として行った。

調査の母集団は全国の20歳～79歳の男女である。まず調査地点を全国から無作為に61地点選び（抽出される確率は市町村の人口比に従った。そのため結果的に都市部が調査地点として選ばれることが多い）、各地点から平均約13人を回答者として無作為に抽出し、計803人から回答を得た。回答者の属性のうち、統計資料から明らかとなっている性別と年齢については、回答者の構成比が母集団の構成比に近くなるよう層化して割り当てた。

この全国調査に加え、人口が多く、またさまざまな点で全国への影響力が強い首都圏（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）については、これと全く同じ調査をさらに122人（12地点）に対して行った。全国調査での首都圏の回答者は214人であるので、合すると336人となる。また、全国調査での首都圏の調査地点数は13であり、合すると25地点となる。首都圏調査での地点の選定は、当初から人口比に応じた確率で首都圏から25地点選んだ場合を想定し、そこから全国調査で選ばれた13地点を差し引いた12地点を首都圏調査の調査地点とした。すなわち、いずれの調査でも、また両者をあわせた調査でも、首都圏の縮図が得られるよう調査を設計した。全国の状況を見る際には、この首都圏調査のデータはもちろん含めないが、首都圏についてより高い精度で詳細に見る際には、首都圏調査のデータを含めた336人のデータを分析することにする。

具体的な調査地点の選定や回答者への個別面接といった実査の部分は、競争入札により（社）新情報センターに委託した。

調査項目のうち音声に関する項目は、調査会社の調査員に判定をまかせることはできないため、調査員には録音だけしてもらい、それを筆者が事後に聴き取ってデータとした。

音声項目については「なぞなぞ式」で回答を求めた。用いた（＝調査員に読ませた）質問文を項目ごとに示すと次のとおりである。回答として期待する単語だけをスムーズに発話してもらえよう、また調査時間を短縮するよう、質問文の文末には「何ですか？」を付けず、いわば言いさしのような質問文とした。

鏡……………顔を写すために使う道具は…。

中学校……小学校の次に行く学校は…。

東……………方角で「西」の反対は…。

英語……………中学に入ってから勉強する外国語は…。

日本語……そこ【＝日本】で使われている言葉は…。

これらのうち「鏡」「中学校」は当初からガ行子音を見るための項目として用意したものである。これに対し、「東」はヒトシの発音、「英語」はエー／エイの発音、「日本語」はニホンゴかニッポンゴかの語形を見ることを目的とする項目であったが、非語頭のガ行子音を含むことから、あわせて分析対象とした。^(注3)

3.2. 調査結果

3.2.1. 全体的傾向

調査結果は図2のとおりであった。

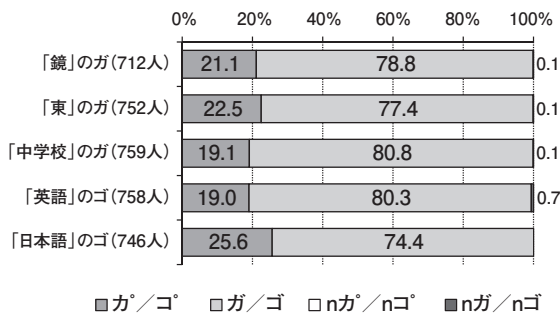


図2 ガ行子音の発音

ガ行鼻音 [ŋ] をカタカナで表記する場合、「カ°」や「ゴ°」と表記することがあることから、凡例ではその表記法で示した。すなわち、「カ°/ゴ°」は「カ°」または「ゴ°」という鼻音 [ŋ] であることを、また「ガ°/ゴ°」は「ガ°」または「ゴ°」という破裂音 [g] であることをそれぞれ示している。また、「nカ°」や「nゴ°」のような「n」は、直前に入り渡り鼻音を伴う発音であることを示している。本来は [̃] で表記すべきものであるが、作図に用いたソフトウェアの制約から [n] で代用した。

調査語の末尾には有効回答者数を () 内に示した。回答が得られなかったり（「わかりません」という“回答”も含む）、得られても適切な回答でないケース等がそれぞれ5%ほどあるため、有効回答者数は803人を下回っている。特に「鏡」では712人と11%も欠けているが、これは「カメラ」とか「写真機」のような、この調査の回答としては不適切な回答が少なくなかったためである。調査票には求めたい回答が示されており、それが得られなかった場合は「それ以外の言い方ではどうでしょうか」と調査員がさらに言い、予定する回答を求めさせたが、通常は言語調査をしているわけではない調査員にはそのことが必ずしも徹底されず、予定以外の回答が得られた場合も、次の質問に進むケースが少なくなかった。特に「鏡」については、話し言葉では「顔を映す」が「顔を写す」とも理解されたことや、調査票に「顔を写す」と表記してしまったため求める語が「カメラ」「写真機」であると調査員が誤認した可能性も考えられる。グラフでは、そうした不適切な回答や無回答を除いた有効回答を母数としたときの発音の割合を示した。なお、「中学校」は「中学」でも可とした（「中学」は約12%）。また、「日本語」はニホンゴでもニッポンゴでも可としたが、ニッポンゴは3%程度に過ぎず、ほとんどはニホンゴであった。

グラフによると、入り渡り鼻音を伴う発音はほとんど聞かれず、大半は [ŋ] か [g] であることがまず確認される。入り渡り鼻音が皆無に近いのは、東北地方を中心に使われていたこの音が現在ではかなり衰退し日常場面でもほとんど使われなくなっていること（山形県鶴岡市で国立国語研究所が1992年に実施した「場面差調査」を分析した尾崎喜光2006a、2006bでそのことが確認される）、また「調査」という非日常的な緊張を伴う場面での発話であり方言音声は一層使いにくい状況であったことなどが関与しているよう。

[ŋ] と [g] の対立について、全国を計量的観点から眺めた場合、現在では [g] が非常に優勢であり、[ŋ] は2割程度にとどまっていることがわかる。全国的に見たとき、ガ行鼻音は現在衰退が著しく進行している。非語頭のガ行子音を [ŋ] で代表させるのは、現在ではかなり実態から離れた状況となっている。総務省の統計によれば、今回調査対象から除外した19歳以下の人口比は2013年10月時点で17.6%、同じく80歳以上は7.3%であることを考えると、日本人全体としてはさらに数値が下がるものと推測される。

[ŋ] の数値（「カ°/ゴ°」の数値）は語により多少異なり、「日本語」でやや高くなる。「日本語」のゴは複合語の後部要素の先頭であるが、結合の度合いがきわめて高くほぼ一語化している「英語」のゴと比べると結合の度合いは相対的に低く、それゆえある程度語頭的に発音されうる。そのことを考えると、[ŋ] の数値はむしろ相対的に低くなることが予想される。それにもかかわらず逆の結果が得られたのは、「日本語」のゴの直前の撥音が進行同化をもたらして [ŋ] の発音を促していることがより大きく関与しているためと考えられる。撥音の直後では [ŋ] になりやすいことについては、安榮京子（1979）、加藤正信（1983）、永田高志（1987）、田中ゆかり・吉田健二（1997）、日比谷潤子（2002）

など、種々の言語内的要因を検討した先行研究も指摘するところであるが、今回の調査でもそのことが確認された。^(注4)

3.2.2. 「鏡」の属性別分析

複合語という事情も直前の撥音も関与しないことから、ある意味において典型的かつ代表的な非語頭のガ行子音と考えられる「鏡」のガの子音について、回答者の属性面から有効回答を分析してみよう。結果は図3のとおりであった。

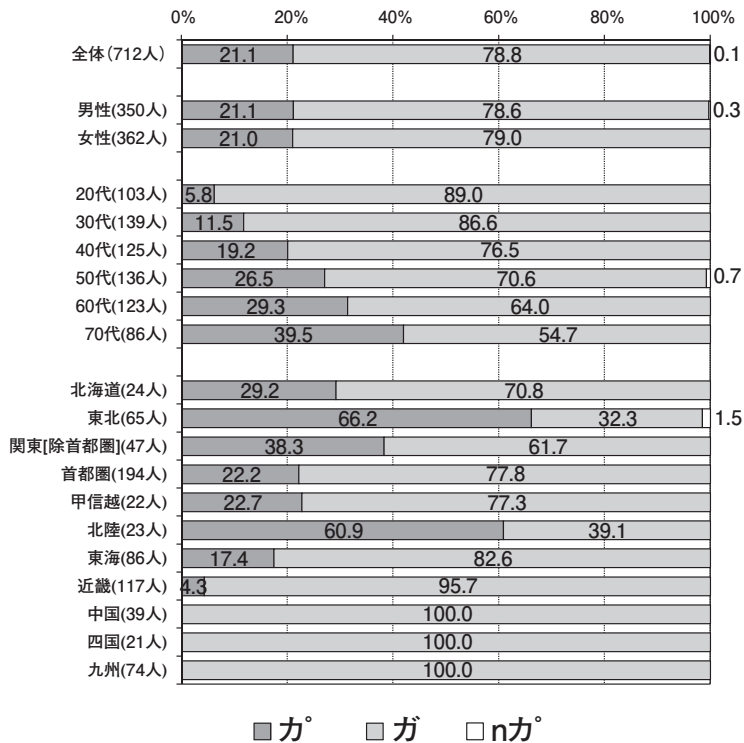


図3 「鏡」のガの発音

(1) 男女差

男女差はほとんど認められない。性別のカテゴリが2つしかなく、従って各カテゴリに入る回答者数も350～360人と多いことから、これはかなり確実に言えることである。

(2) 年齢差

年齢差が明確に認められる。[ŋ]の数値は70代でも40%と少数派であるが、下の年齢層になるにつれ数値は一貫して減少し、20代ではわずか6%にまで縮小している。

こうした年齢差が伴う状況については2つの可能性が考えられる。

一つは、現在進行中の変化が年齢差として反映されているという見方である。すなわち、AからBへの言語変化が生じている場合、若年層ほどBの使用率が高くなるのが当然予想されることから、年齢差を言語変化の反映と見るのである。今回の調査について言

えば [ŋ] の衰退、逆に言えば [g] の普及が年齢差として表れていると見るものである。

もう一つの可能性は、高年層になるにつれ [ŋ] の使用者率が增加するという加齢変化を読み取る見方である。文末の「～ですなあ」「～ますなあ」のような「丁寧語＋終助詞「な(あ)」」の使用に加齢変化が認められることについては尾崎喜光(2014)等の指摘があるが、音声についての個人内での加齢変化は、意識的な学習や個別語での変化を除けば、それほど一般的なことではないと思われる。

国立国語研究所は1986年に富良野市で方言の共通語化をめぐる多人数調査を行っているが、その27年前に実施した多人数調査で回答者となった者のうち1986年にも回答に応じてくれた者を対象とするパネル調査もあわせて実施した。27年前のデータは調査員3名による調査現場での判定によるものであるのに対し(録音資料はない)、第2回の方は筆者一人が事後に録音を聞く方法であるため厳密な比較は難しいが、両データを分析した尾崎喜光(1997)によると、ガ行子音について個人内でこの間変化が見られた者はほとんどいなかったこと、変化が認められたわずかなケースは [ŋ] から [g] への変化にほぼ限られていたこと、従って1986年の調査に認められた年齢差は富良野市における [ŋ] の衰退が反映されたものと見るのが妥当であることを述べている。

国立国語研究所は翌1987年に札幌市でも同様の多人数調査を行っている。その後2011～12年に、無作為に選ばれた206人を対象に同様の第2回調査を行った^(註5)。同一人物を対象にしたパネル調査ではないが、調査項目が重なる「道具」「中学(校)」についてコーホート(同時期出生集団)に分けて分析した。[ŋ] で発音した人の比率を示すと図4～図7のとおりである。

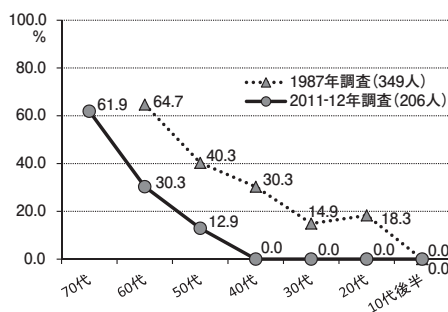


図4 札幌市の「道具」のグの [ŋ] (年齢層別)

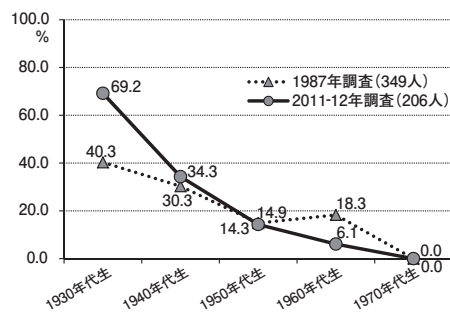


図5 札幌市の「道具」のグの [ŋ] (出生年代別)

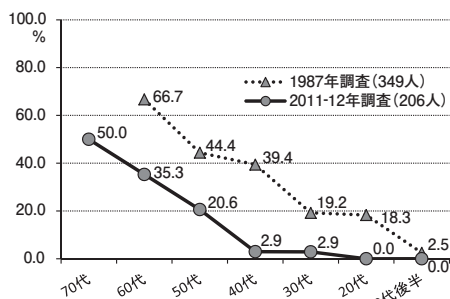


図6 札幌市の「中学(校)」のガの [ŋ] (年齢層別)

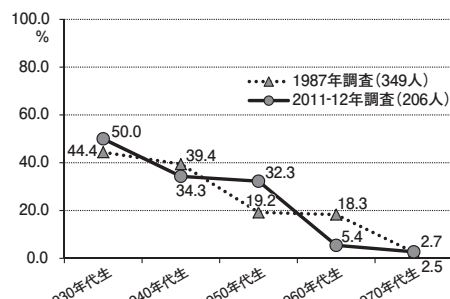


図7 札幌市の「中学(校)」のガの [ŋ] (出生年代別)

図4・図6の年齢層別グラフによると、点線で示した第1回調査の時点からすでに [ŋ] の数値が低い10代後半を除き、[ŋ]の数値はこの間大幅に(20～40%程度)低下しており、どの年齢層でも実時間による変化([ŋ]の衰退)が生じていることがわかる。しかし、図5・図7により同時期出生年代で比較すると、図4・図6に見られたほどの大幅な低下は見られないこともわかる。すなわち、富良野市でのパネル調査の結果と同様、ガ行子音については加齢変化は基本的に無いと言ってよい状況である。

これに関連し、馬瀬良雄・渡辺喜代子・清水千寿子・中東靖恵(2004)は、長野市の小中学生を対象に、1975年から1999年にかけて経年調査を計4回行っているが、第4回の調査では、21年前に調査した同じ回答者22名に対する再調査も行っている。それによると、非鼻音率([g]の率)はこの間上昇していること(22名のうち18名が上昇)、すなわち個人の中でも非鼻音化が進行していることを報告している。北海道での調査と異なる結果であるが、調査した地域や時代が異なることが原因となっているのかもしれない。

以上の知見から、ガ行子音について年齢差が認められた場合は、加齢変化の反映と見るべき部分もありうるが、言語変化の反映と見るべき部分も相当大きいものと考えられる。図3について言えば、この年齢差から[ŋ]の衰退、すなわち[ŋ]から[g]への置き換えとしての変化を読み取るべきであろう。個人内での[ŋ]から[g]への加齢変化もありうることを考えると、いわば“加速”する形での[ŋ]の衰退が反映された可能性もある。

なお、[ŋ]の使用率が若年層に向けて明確に減少していることについては、いろいろな地域からの調査報告がある。

筆者も調査にたずさわった札幌市と釧路市での調査結果を示すと図8のようである。札幌市の1985～86年調査は札幌市で生育した者のみは無作為に抽出しての調査(先に引用した国立国語研究所による札幌調査では「鏡」は調査されていない)、2011～12年の札幌市・釧路市での調査は実査のみ調査会社に委託し、録音を筆者が聴き取ったものである。

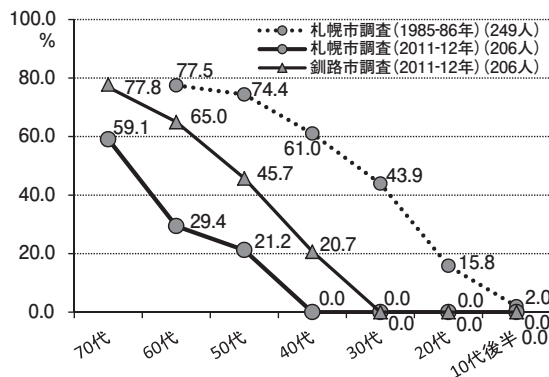


図8 北海道での「鏡」のガの [ŋ] (年齢層別)

札幌市では昔も今も、また釧路市では現在、[ŋ]の数値は若年層に向け一貫して減少していることが確認される。現在の札幌市では40代で、また釧路市でも30代で、「鏡」の[ŋ]は消滅している。札幌市でのこの状況は「道具」[中学(校)]でも観察された。

札幌市では、図4・図6と同様の実時間に伴う減少も認められるが、「鏡」では両調査の母集団の性質が異なるためか、下落の幅は大きくなる。

現在の札幌市での衰退は、釧路市よりも約10年先んじているように読める。国立国語研究所が1986～87年度に行った札幌市・富良野市での社会言語学的調査についてガ行子音を分析した尾崎喜光(1997)によれば、[ŋ]の数値はどの年齢層でも富良野市の方が低くなっている。相澤正夫(1994)は、[ŋ]の消失・保持について「含意尺度」という観点から分析するため、同じ札幌市のデータを自身の耳で改めて統一的に聴き取っている。

富良野市について同様に分析し、富良野市と札幌市を比較した相澤正夫（1995）は、ガ行鼻音の衰退は富良野市の方が札幌市に先行していること（しかし変化のプロセス自体はきわめてよく似ていること）を指摘し、地域差について同じ結論を得ている^(注6)。これらの調査結果を総合すれば、北海道における〔ŋ〕の割合に、富良野市<札幌市<釧路市という地域間の序列ならびにそこから推測される衰退の順序が考えられそうである。同じ北海道内に観察される〔ŋ〕の消失進度の地域差を生む要因も、今後究明すべき課題である。

若年層になるにつれ〔ŋ〕で発音する人の割合が減少する、あるいは若年層で〔ŋ〕の数値が低い傾向は、北海道以外の〔ŋ〕を持っているさまざまな地域で調査報告がある。

東京については、純粹に東京っ子である中学生男子（15～16歳）70人を対象に1941年に調査した金田一春彦（1967）、東京都で生まれ育った中学生50人を対象に1957年に調査した岡崎有鄰（1958）、東京生まれの東京都（中野区）在住者138人を対象に1984年に調査した永田高志（1987）、東京在住の若年層（女子大学生）203人と高年層27人を対象に1987年・1989年に調査した嶺田明美（1991）、住民票から無作為に抽出した東京都文京区在住者の自然な会話（調査者との会話）を録音した資料から都内出身者62名のガ行子音を分析した日比谷潤子（2002・2012）などの研究がある。

東京周辺では、横浜市およびその周辺に住む若年層（大学生と中学生）106人を調査した安栄京子（1979）、栃木県の〔ŋ〕〔g〕の混用地帯61地点で3世代を対象に1975～76年に調査した森下喜一（1977）、高年層・青年層各1名ではあるが栃木県鹿沼市で670語という多数の語について調査した高村恵子（1993）、山梨県の甲府市等で中学生約500人を対象に1995年に調査した田中ゆかり・吉田健二（1997）、長野市で小中学生を対象に1975年から1999年にかけて計4回経年調査した馬瀬良雄・渡辺喜代子・清水千寿子・中東靖恵（2004）および中東靖恵・馬瀬良雄・Joko, Alice T.（2002）などの研究がある。

西日本では、大阪市およびその周辺の小中学校に通学する児童・生徒を調査した杉藤美代子（1961）、和歌山県新宮市から奈良県御所市までを十津川沿いに26地点でグロットグラム調査したところ北部から〔ŋ〕が衰退しつつあることを示した真田信治・尾崎喜光（1988）などの研究がある。〔g〕が残存する高知県の18地点で老壮年層と青少年層を調査した下村泰子（1966）は、青少年層になるほど〔g〕化していることを報告している。

今回の全国多人数調査から首都圏を取り出し、同時期に別途行なった首都圏調査のデータを含めた336人を年齢層別に分析し、全国平均と比較して示すと図9のとおりである。

東京をはじめとする首都圏を対象にしたさまざまな先行研究において指摘されてきたのと同様に、今回の調査でも、首都圏においても年齢差が明確に認められる。〔ŋ〕を持っている人の割合は70代でも4割にとどまるが、若年層になるにしたがい一貫して減少し、20代では0%となっている。全国平均と比べると線はほぼ重なり、首都圏の状況は全国の状況を数値的に代表する形となっている。

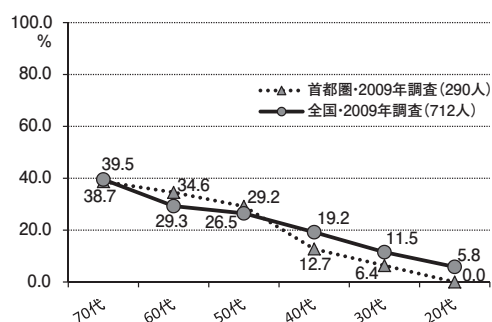


図9 首都圏での「鏡」のガの〔ŋ〕(年齢層別)

(3) 地域差

地域区分が分類法により異なる可能性のある地域について、図3の補足説明をまずしておく。ここで言う「東海」とは、静岡県・愛知県・岐阜県・三重県のことである。また「首都圏」とは、前にも述べたように、東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県のことである。

地域差を考えるにあたっては、それぞれの地域に、どこからどれほどの転入者がいるかが気になる。調査では回答者の出身地も質問しているが、その結果を示すと図10のとおりである。ここで言う「地元」とは、出身地が各地域ブロック内であるという意味である。同じ地域ブロック内での移住があった場合も「地元」としている。

転入者が多いと考えられる首都圏も「地元」の割合は65%に達している。「甲信越」を除くそれ以外の地域の「地元」の割合は8～9割の多きを占める。首都圏を含め回答者の多数は「地元」出身であり、「地元」の状況を大きく反映したデータとなっている。

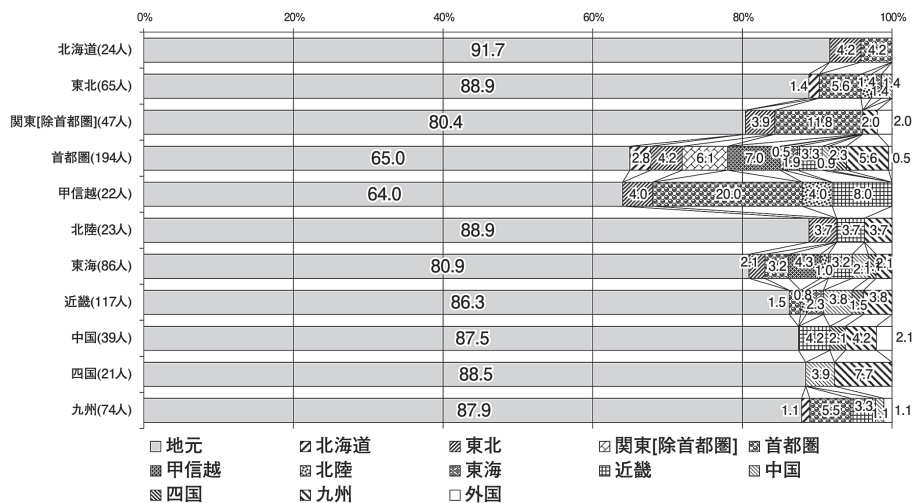


図10 回答者の出身地

先に示した図3によると、地域差が明確に認められる。図1をはじめとする言語地理学的調査から、西日本には「[η]」がほとんど分布していないことが明らかになっているが、今回の計量的調査でも、西日本（中国・四国・九州）には「[η]」が全く認められず、「[η]」を使う地域は近畿以東に限定されることが確認される。^(注7)

「[η]」の境界地域である近畿地方は、言語地理学的調査では「[η]」の地域が広く分布しているが、今回の調査によると「[η]」の使用率はわずか4.3%にとどまり、現在では衰退が著しく進行している。まもなく西日本と同様の状況になることが予想される。

「[η]」が一定の割合認められる東海以東も数値はそれほど高くなく、東北と北陸を除けば2～3割にとどまる。「[η]」が使われる地域とされている東日本でも、現在では「[η]」は全般的に衰退している。全国各地の高校生と老年層を対象に録音調査した井上史雄(1998)は、「[η]」の使用地域は現在大幅に縮小し、「[η]」の消失は全国的に進んでいること、また人口比で言えば今や鼻濁音は少数派であることを指摘しているが、今回の調査でも同様の結果が得られた。

「[η]」の使用率が半数を超えるのは東北と北陸である。このうち北陸は、回答者数が

23人と少ないことを考えると安定した数値ではない可能性も考えられる。これに対し東北は回答者数が65人と少なくないことを考えると、この数値の高さは意味を持っているものと考えられる。

他の地域と異なり東北地方は [ŋ] が優勢であることについては井上史雄 (1971・1998) も指摘している。また、大橋純一 (2001・2007) も、1995年から継続的に実施している青森県・宮城県の特定期域での多人数調査、および東北地方・新潟県での多地点調査の結果を分析し、若年層の間でも [ŋ] が保持される傾向にあること、特に青森県の青少年層は中高年層以上に [ŋ] を保持していることを報告している。

今回の全国多人数調査から、首都圏と対比する形で東北地方を年齢層別に示したのが図11である。東北地方でも若年層に向けてのゆるやかな衰退傾向が認められるものの、20代でも4割以上が [ŋ] を使用しており、それが0%である首都圏との対照が鮮明である。

少し古いデータになるが、国立国語研究所が山形県鶴岡市で1991年に実施した多人数調査の結果を、それと近い時期である1985年に筆者が実施した札幌市での結果と対比する形で示したのが図12である。鶴岡市のデータは筆者が聴きなおしたものである。これによると、札幌市では年齢差が著しく認められるのに対し、鶴岡市ではほとんど認められない。その結果、40代以上では [ŋ] の使用者率について両市でほとんど違いがない状況であったものが、20代では大きな開きが生じる状況となっている。筆者が関わったこうした調査からも、東北地方では [ŋ] が保持される傾向があることが確認される。

ではなぜ東北地方では [ŋ] が保持されやすいのであろうか。次節では、[ŋ] が衰退する理由とあわせ、この点について考察する。

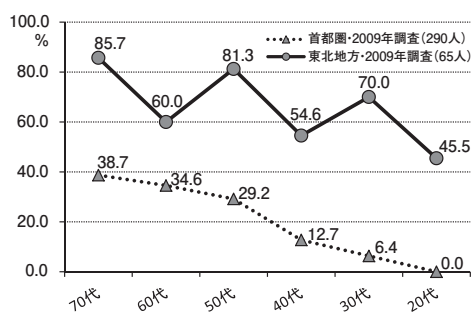


図11 「鏡」 の方の [ŋ] の地域間比較 (a)

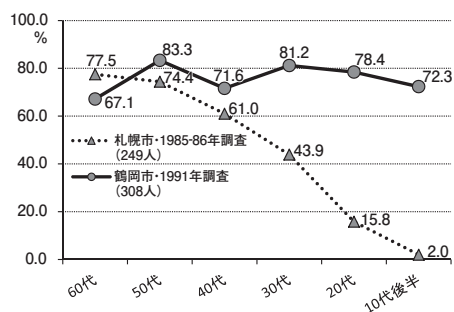


図12 「鏡」 の方の [ŋ] 地域間比較 (b)

4. ガ行鼻音の衰退・保持の理由

4.1. ガ行鼻音が衰退する理由

非語頭のガ行鼻音が現在衰退しつつある理由について、中東靖恵 (1999・2000) は次の2点を指摘する。(注8)

- (1) ガ行鼻音かガ行非鼻音かは意味の弁別にほとんど役に立たない。
- (2) 正書法においてガ行鼻音とガ行非鼻音を書き分ける手段がない。

第一の点について説明を補うと、調音点が同じ破裂音 [d] と鼻音 [n] の違いは、たとえば「派手」と「羽」のミニマルペアのように意味の違いを生む。また、破裂音 [b] と鼻音 [m] の違いも、「カバ」と「鎌」のミニマルペアのように意味の違いを生む。と

ころが破裂音 [g] と鼻音 [ŋ] の違いはどうかというと、[kage] と発音しても [kaŋe] と発音しても「影」の意味であり、意味の違いを生まないということである。つまり、両音を弁別する必要性は低いのである。

第二の点については、もしガ行鼻音とガ行非鼻音の違いを明示的に示す必要があり、かつそれをカタカナで表記する場合は、[ga] は「ガ」、[ŋa] は「カ」のように書き分ける習慣がある。しかし、誰もが日常的に使うような正書法としては表記の区別がない。もし正書法で [ga] と [ŋa] を書き分けていたならば、これらの発音の違いを常に意識しなければならぬわけであるから、両者の発音の区別は保たれ、従って [ŋ] は衰退することがなかった可能性がおおいに考えられる。

いずれも説得力のある説明であるが、これらに加えて次の2点もガ行鼻音の衰退の要因となっているのではないかと考える。

(3) 連濁によるガ行音は [g] で発音するのが自然でかつ体系的であることの影響。

説明を補う。「狸」の語頭の子音は無声音の [t] だが、直前に「大(おお)」が付いて複合語「大狸」となると連濁が生じ、子音は有声音の [d] となる。また、「星」の語頭の子音は無声音の [h] だが(歴史時代以前の日本語では [p] だと考えられている)、直前に「流れ」が付いて複合語「流れ星」となると連濁が生じ、子音は有声音の [b] となる。これと並行的に考えると、語頭の無声音の [k] は、複合語で連濁が生じると有声音の [g] となるのが自然である。たとえば「事(こと)」の語頭の子音は無声音の [k] だが、「大(おお)」が付いて複合語「大事」となると、[k] に対応した [g] で発音するのが自然であり体系的にも整う。つまり、無声子音を語頭に持つ単純語を、複合語の後部要素としかつ連濁させる場合は、同じ調音点の有声音で対応させる(有声音に変える)というルールが働くため、カ行音がかかわる複合語では、[ŋ] よりも [g] の方が自然だということになる。連濁による非語頭のガ行音は多数あり、それらの発音で [g] が優勢になると、「鏡」のような連濁によらない非語頭のガ行音も統一的に [g] で発音しようという意識が働くに違いない。ガ行鼻音の衰退にはこうした「連濁」という事情も関与している可能性がおおいに考えられる。

(4) 語頭に有声音を持つ語が複合語の後部要素となったときの音声の保持。

説明を補う。「大学」の語頭の子音は有声音の [d] だが、直前に「地方」が付いて複合語「地方大学」となった場合も、子音は [d] のままである。また、「バラ」の語頭の子音は有声音の [b] だが、直前に「白」が付いて複合語「白バラ」となった場合も、子音は [b] のままである。これと並行的に考えると、語頭の有声音の [g] は、複合語の後部要素となった場合も [g] のままであるのが自然である。たとえば「学校」の語頭の子音は有声音の [g] だが、「小(しょう)」が付いて複合語「小学校」となった場合も [g] で発音するのが自然であり体系的にも整う。「小学校」のガの子音を [ŋ] で発音するのはむしろ不自然かつ非体系的である。こうした、複合語の後部要素となったときの発音の一貫性ということも、ガ行鼻音の衰退に関与している可能性がおおいに考えられる。

4.2. ガ行鼻音が東北地方で保持される理由

これに対し東北地方では、それ以外の地域と比べると [ŋ] の使用者率が高く、衰退もゆるやかである。

東北地方で [ŋ] が保たれやすい理由について井上史雄 (1971) は、非語頭のガ行音だけを見るのではなく他の音との関係を含めた音韻体系という観点から見るべきであることを主張し、その原因については、この地域に広く見られる非語頭の無声子音の有声化が関与している可能性を指摘している。すなわち、この地域では非語頭のカ行・タ行の子音は有声化するが、この有声化によるカ行の [-g-] と十分に区別するために、ガ行の子音の方は子音体系の「あきま」ともなっていた [-ŋ-] を利用しているものと考えられると述べている。別の見方をすれば、非語頭でカ行・タ行の子音が有声化する地域では、非語頭のガ行子音は [-g-] になりえないとする。一般書として書かれた井上史雄 (1998) も、暗示する形での言及ではあるが、分かりやすく説明している。それによると、もしガ行音が [ŋ] から [g] に変化すれば (たとえば「鍵」をカギ [kagi])、有声化による [g] (たとえば「柿」のカギ [kagi]) と発音が区別されなくなり不都合が生じるとする。

この点については大橋純一 (2007) も、有声化した非語頭のカ行音との弁別義務という、東北ならではの特殊事情が深く関わっていることを指摘している。

鼻濁音を持っている他の地域と比べ、東北地方では鼻濁音の衰退がそれほど顕著ではないこと理由説明として、これらは重要な指摘である。

そこで、この点についての検証を試みる。

現在では東北地方にも、有声化という特徴を持っている人と持っていない人がいる。調査対象者をこの2つのグループに分け、有声化を持っているグループ (たとえば「柿」を [kagi] と発音するグループ) の方が、有声化を持っていないグループ (たとえば「柿」を [kaki] と発音するグループ) よりも確かに [ŋ] の使用者率が高いか否かを検証する。

用いるデータは、国立国語研究所が山形県鶴岡市で1992年に実施した「場面差調査」で得たデータである。この調査は、前年の1991年に実施した第3回継続調査の検証として行なったものである。なぞなぞ式や絵を見せてその語だけを発音させる従来の継続調査の方法によると、東北方言に特徴的な音声の使用率は1991年の時点で非常に少なくなっているが、実際の生活の中での使用者率はもっと高いのではないかという問題意識から企画・立案された調査である。

いわば手を変え品を変えて調査したのであるが、それでも使用者率が低いままの音声項目が少なくなかった。しかし、想定させた日常場面では方言音声の使用率が大きく上昇する項目もあった。それが、非語頭の無声子音の有声化と、母音 [i] の中舌化である。

この2つの方言音声は、調査当時もじつはよく使われていることがこの調査で明らかになったが、その状況は現在も続いているかもしれない。岩手県を舞台にしたNHKの朝の連続テレビ小説「あまちゃん」(2013年度上半期放送)でも、若い女性の主人公が唯一使っていた(使われていた)方言音声は、このうちの非語頭の無声子音の有声化であった。

これら2つの方言音声のうち有声化に注目し、使用者率が最大となりかつグループを大きく二分する「親しい相手」(家族や友人)の場面でのデータを用い、それぞれのグループでのガ行子音の使用率がどのようなものであるかを分析する。

回答者は175人である。1991年に実施した第3回調査の「継続調査」の回答者87人と、同年に個人を再調査した「パネル調査」の回答者88人を調査の回答者とした。前年の調査に協力的だと判断された人のみを対象としたので、数値自体は当時の鶴岡市を正確に反映している保証はないが、場面間の序列は反映されているものと考えられる。平均年齢が

高いパネル調査の回答者を含むため、「場面差調査」の回答者の平均年齢は42.0歳である。

調査概要と得られた結果については尾崎喜光(2006a・2006b)を参照されたいが、ここでグループ分けに用いた「猫」のこの有声化について、場面(発話スタイルや相手)による使い分けを示したのが図13である(適切な回答が得られなかったケースがあるため回答者数が175人に満たない「場面」もある)。一方、ガ行子音の分析に用いた「鏡」のガの使い分けを示したのが図14である。ガ行子音については使い分けがほとんど認められない。この点については、2011～12年に筆者らが実施した札幌市と釧路市の調査でも確認している。回答者には親しい人物と疎遠な人物を会話の相手として想定させ、「鏡」等のキーワードを含めながら発話してもらった。「鏡」については、「近くで鏡が割れるような音がしなかったか?」という趣旨のことを2種の相手に対し、発話文としてそれらしく言ってもらった。結果は図15・図16のとおりであり、使い分けはほとんど認められない。

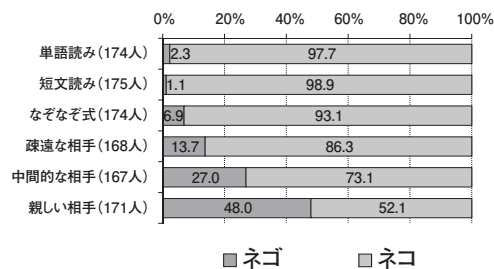


図13 「猫」のこの子音の使い分け(鶴岡市)

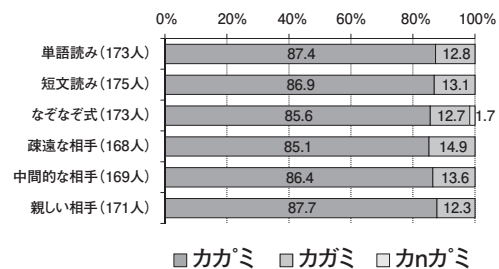


図14 「鏡」のガの子音の使い分け(鶴岡市)

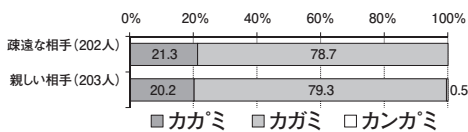


図15 「鏡」のガの子音の使い分け(札幌市)

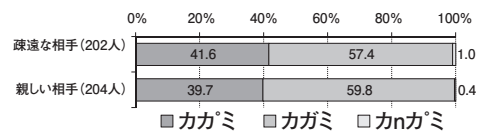


図16 「鏡」のガの子音の使い分け(釧路市)

鶴岡調査の「親しい相手」のデータに注目し、「ネコ」[neko]と発音したグループと「ネゴ」[nego]と発音したグループで、「鏡」のガ行子音がどうであったかを分析した。結果は図17のとおりであった。

「全体」を見ると、「ネコ」のグループと「ネゴ」のグループとで「鏡」のガの発音に顕著な違いはないが、「ネコ」のグループよりも「ネゴ」のグループの方が、[ŋ]を含む「カガミ」と発音した人の割合が多少高く、有声化のあることがガ行鼻音の保持を支えている可能性が考えられる。ただし、「ネゴ」と発音する人は高年層に多く、その高年層はガ行鼻音を使う人が多いためこのようになったという可能性も考えられる。そこで、年齢層に分けて集計した箇所を見てみよう。

3層に分けると各層の人数が少なくなりデータの安定性が低化するが、比較的人数の多い「60～70代」に注目すると、先ほどと同様の傾向が観察される。また、男女別に見た場合、女性においては同様の傾向が観察される。

図12でも確認できるように、当時の鶴岡市ではガ行鼻音の「カガミ」の使用者率がかなり高いため、「天井効果」により両音の関係が十分確認できなかったが、現在は[ŋ]と[g]

ともう少し分散していると考えられるので、他方の有声化の数値がまだ極端に低くなければ、両音の関係をさらに明確に把握することが期待できる。

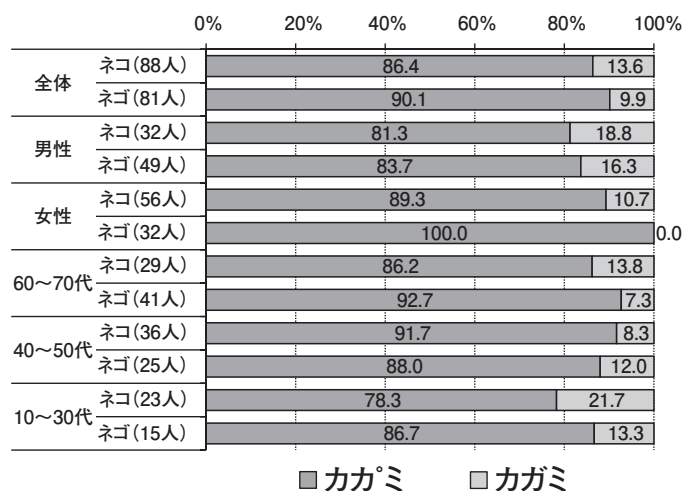


図 17 「猫」のコの子音と「鏡」のガの子音の関係 (鶴岡市)

5. まとめ

全国多人数調査の結果から、20～79歳の範囲で現在ガ行鼻音を使っている人は2割程度にまで衰退していることが明らかになった。

男女差はほとんど見られない一方で、年齢差と地域差は明確に認められる。このうち年齢差について言えば、若年層になるにつれ [ɲ] の数値は一貫して減少する。これは言語変化 ([ɲ] の衰退) が年齢差として反映されているところが大きいものと考えられる。

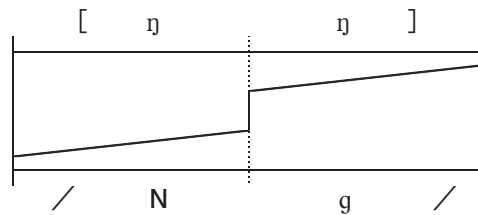
また、地域差について言えば、中国・四国・九州では [ɲ] を使う人は現在でもほとんどいないが、近畿もそれに近い状況となっている。それ以外の東日本では [ɲ] が使われているが、使用者率はそれほど高くない。[ɲ] が使われていた地域で [ɲ] が衰退しつつある原因としては、[ɲ] と [g] の意味上の弁別性が低いことや、両音を書き分けるような正書法がないことに加え、連濁する場合は [ɲ] よりも [g] の方が自然で体系的であること、複合語の後部要素となる際には単純語の語頭の [g] は [ɲ] とせず [g] のままの方が自然で体系的であることの影響が可能性としておおいに考えられることを指摘した。

回答者が一定数いる中で唯一 [ɲ] の数値が高いのは東北であり、現在でも7割近くが使っている。この理由としては、先行研究も指摘するように、東北で行われている非語頭の無声子音の有声化が関わっていることが考えられ、鶴岡市での調査データを用いて検証した。その結果、ガ行鼻音の天井効果もあり明確な結論は得られなかったが、確かにその可能性があることを指摘した。

ガ行鼻音は今後も衰退の一途をたどると考えられる。来世紀には、東北地方にわずかに残るのみで、それ以外では消滅している可能性が高い。動態が著しいガ行鼻音をさらに継続して追跡したい。

注

- 1 [g] は「(有声) 軟口蓋破裂音」、[ŋ] は「軟口蓋鼻音」と音声学的に呼ばれる音である。文脈から明らかでない場合は、[g] を単に「破裂音」、[ŋ] を「鼻音」と呼ぶこともある。また、[g] を「ジー」、[ŋ] を「エヌジー」（英語の「song」や「thing」など「ng」でつづられる箇所に現れることから）と呼ぶこともある。本稿では、[g] を「ジー」、[ŋ] を「エヌジー」と呼ぶことにする。
- 2 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」という研究課題で行われた調査である。
- 3 音声項目については、音声判定の「確信度」も記録した。回答者全員の全項目の発音をいずれかの音として判定したが、別の音として判定する可能性があるかないかをチェックしたのである（データとして採用したのは可能性がより高いと判断した音の方）。ガ行子音について「別の音としての聴き取りも可能」と判断された割合は、「鏡」3.7%、「東」1.7%、「中学校」1.8%、「英語」1.5%、「日本語」8.7%であった。「日本語」を除き数値はいずれもきわめて小さく、判定を迷うケースは基本的に少なかった。
- 4 なお、[ŋ] で現れた音を、音素としても /ŋ/ と考えるべきか否かについては慎重を要しよう。服部四郎（1960）が指摘するように、連続体として表れる音のうちのある特徴は、隣接する別の音素に帰すべき特徴である可能性が考えられるからである。次の図は「音楽」のンガの部分を図式的に示したものである（ガの母音は省略）。



ガの子音の部分は、直前の撥音 [ŋ] の要素が流れ込んでいるため鼻音として聞こえるが、音素としては /ŋ/ ではなく /g/ と考えるべき可能性もある。NHK の新人アナウンサー 20 人を対象に聞き取り調査（発音調査）をした大西勝也・柴田実（2000）によれば、[ŋ] に聞こえる場合であっても、音声分析の波形を見ると、破裂音 [g] が混在する“擬似ガ行鼻音”があったという。「注3」で述べたように、ガ行子音については判定を迷うケースは基本的に少なかったが、直前に撥音を伴う「日本語」のゴについては、他の項目と比べ判定に迷うケースの割合が相対的に高かった。本来は [g] であったものが、直前の [ŋ] の鼻音性が流れ込んだため [ŋ] にも聞こえて判定を迷ったケースがこの中に少なくなかったものと考えられる。こうした点については、たとえば「今、何て言ったの？」と幼児から聞かれた大人が、「オ、ン、ガ、ク」と1拍ずつ区切った発音で答える場合においてもガの子音が [ŋ] で発音されるか（つまり音素としても /ŋ/ と考えられるか）などにより、さらに検討が必要であろう。

- 5 第2回調査は、国立国語研究所の朝日祥之准教授をリーダーとする共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」の一環として実施したものである。あわせて同時期に、北海道釧路市でも 206 人を対象に全く同じ調査を行なっている。実査はいずれも調査会社に委託し、音声項目は録音のみを行わせ、筆者が聴き取りを行った。1987年の札幌調査の聴き取りも筆者が担当した。なお、ガ行子音の調査結果については、朝日祥之・尾崎喜光（2013）で概要を報告している。

- 6 札幌市と富良野市のガ行子音については、その後南部智史・朝日祥之・相澤正夫(2014)が、ロジスティック回帰分析を用いて、言語内的・言語外的要因からさらに多角的に分析し直している。
- 7 西日本では [ŋ] が全く使われないため、この地域に住む人の中には、[ŋ] が日常的な話し言葉として使われているという意識を持たない人もいる。岡山県で生まれ育った50代のある女性は「鼻濁音というのは歌を歌うときだけに使う特別な発音だと思った。実際に話し言葉で使っている人がいるとは思わなかった。」という感想を聞かせてくれた。日常の話し言葉では [ŋ] を使わない人であっても、歌唱では使うことがあることについては、J-pop の3人組ユニット「いきものがかり」のメインボーカルを担当する吉岡聖恵のラジオ番組での話し言葉と歌唱での発音を比較した山田敏弘(2013)の研究がある。
- 8 かつての日本語に存在したと考えられる非語頭のバ行子音・ダ行子音・ガ行子音の直前の入り渡り鼻音の脱落と語頭・非語頭の発音の体系性という点からもガ行鼻音の衰退を説明している。長いスパンでの言語変化の説明として説得力があるが、現代人の意識にはほとんど上らない現象であると考えられるため、ここでは取り上げない。

参考文献

- 相澤正夫(1994)「ガ行鼻音保持の傾向性と含意尺度—札幌市民調査の事例から—」『研究報告集』15(秀英出版)
- (1995)「富良野市におけるガ行鼻音の動向」『研究報告集』16(秀英出版)
- 朝日祥之・尾崎喜光(2013)「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その2—音韻・アクセント項目からみる—」『北海道方言研究会会報』90 *第205回例会(2013年11月10日)での同名の研究発表で用いた資料を収録したもの。
- 井上史雄(1971)「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86
- (1998)『日本語ウォッチング』(岩波新書)
- 大西勝也・柴田実(2000)「ガ行鼻音(鼻濁音)教育への試み—新人アナウンサー研修から—」『放送研究と調査』50-11
- 大橋純一(2001)「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』151
- (2007)「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『国語論究』13(明治書院)
- 岡崎有鄰(1958)「東京都内の中学生のガ行鼻音調査」『音声学会会報』96
- 尾崎喜光(1997)「発音—富良野・札幌継続調査から—」国立国語研究所編『北海道における共通語化と言語生活の実態(中間報告)』(内部資料)
- (2006a)「音声の使い分け(1)—これまでの調査方法でとらえてきたもの—」国立国語研究所編『方言使用の場面的多様性—鶴岡市における場面差調査から—』(内部資料)
- (2006b)「山形県鶴岡市における『場面差調査』」国立国語研究所編『日本語科学』20(国書刊行会)
- (2014)「中間世代のことは」『日本語学』33-1
- 加藤正信(1983)「東京における年齢別音声調査」井上史雄編『<新方言>と<言葉の乱れ>に関する社会言語学的研究』(科研報告書)
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』(東京堂出版) *「8 ガ行鼻音論」
- 国立国語研究所(1966)『日本言語地図 第1集』(大蔵省印刷局)
- 真田信治(1979)「ガ行子音—標準語のゆれ—」徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書)
- 真田信治・尾崎喜光(1988)「十津川方言音声のグロットグラム—ガ行子音・ダ行子音—」『待兼山論叢 日本学篇』22

- 下村泰子 (1966) 「高知県下におけるガ行子音の推移について」『高知女子大國文』 2
- 杉藤美代子 (1961) 「大阪における鼻濁音について」『音声学会会報』 107
- 高村恵子 (1993) 「栃木県鹿沼市方言におけるガ行子音の実態—ガ行鼻音の消失傾向—」『群馬県立女子大学国文学研究』 13
- 田中ゆかり・吉田健二 (1997) 「変異消失の過程とその制約—山梨県西部域若年層におけるガ行子音—」『計量国語学』 20-8
- 永田高志 (1987) 「東京におけるガ行鼻濁音の消失」『言語生活』 430 (筑摩書房)
- 中東靖恵 (1999) 「若年層話者のガ行鼻音に対する意識—近畿以西, 関東, 東北・北海道地域出身者の比較—」『岡山大学文学部紀要』 32
- (2000) 「若年層ガ行非鼻音話者のガ行鼻音に対する意識」『岡山大学言語学論叢』 7
- 中東靖恵・馬瀬良雄・Joko, Alice T. (2002) 「国内・海外の日本語教育におけるガ行鼻音の取り扱い—ガ行鼻音教育の必要性の是非をめぐって—」『岡山大学文学部紀要』 37
- 南部智史・朝日祥之・相澤正夫 (2014) 「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について—札幌と富良野の言語調査データを利用して—」『国立国語研究所論集』 7
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』 (岩波書店) * 「4. 音韻論 (1)」
- 日比谷潤子 (2002) 「言語変異の地理的差異」『音声研究』 6-3
- (2012) 「発音の変化を分析する」日比谷潤子編著『はじめて学ぶ社会言語学—ことばのバリエーションを考える 14 章—』 (ミネルヴァ書房)
- 馬瀬良雄・渡辺喜代子・清水千寿子・中東靖恵 (2004) 「現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位」『ことばと文化』 2
- 嶺田明美 (1991) 「ガ行鼻濁音について」『学苑』 617
- 森下喜一 (1977) 「語中語尾におけるガ行鼻音の衰退過程について」『野州国文学』 19
- 安栄京子 (1979) 「ガ行鼻濁音について—現代若年層の発音の実態—」『玉藻』 15
- 山田敏弘 (2013) 「いきものがかりの言語学 (1) —音声的特徴—」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 61-2

- 6 札幌市と富良野市のガ行子音については、その後南部智史・朝日祥之・相澤正夫 (2014) が、ロジスティック回帰分析を用いて、言語内的・言語外的要因からさらに多角的に分析し直している。
- 7 西日本では [ŋ] が全く使われないため、この地域に住む人の中には、[ŋ] が日常的な話し言葉として使われているという意識を持たない人もいる。岡山県で生まれ育った 50 代のある女性は「鼻濁音というのは歌を歌うときだけに使う特別な発音だと思った。実際に話し言葉で使っている人がいるとは思わなかった。」という感想を聞かせてくれた。日常の話し言葉では [ŋ] を使わない人であっても、歌唱では使うことがあることについては、J-pop の 3 人組ユニット「いきものがかり」のメインボーカルを担当する吉岡聖恵のラジオ番組での話し言葉と歌唱での発音を比較した山田敏弘 (2013) の研究がある。
- 8 かつての日本語に存在したと考えられる非語頭のバ行子音・ダ行子音・ガ行子音の直前の入り渡り鼻音の脱落と語頭・非語頭の発音の体系性という点からもガ行鼻音の衰退を説明している。長いスパンでの言語変化の説明として説得力があるが、現代人の意識にはほとんど上らない現象であると考えられるため、ここでは取り上げない。

参考文献

- 相澤正夫 (1994) 「ガ行鼻音保持の傾向性と含意尺度—札幌市民調査の事例から—」『研究報告集』15 (秀英出版)
- (1995) 「富良野市におけるガ行鼻音の動向」『研究報告集』16 (秀英出版)
- 朝日祥之・尾崎喜光 (2013) 「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その 2—音韻・アクセント項目からみる—」『北海道方言研究会会報』90 * 第 205 回例会 (2013 年 11 月 10 日) での同名の研究発表で用いた資料を収録したもの。
- 井上史雄 (1971) 「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86
- (1998) 『日本語ウォッチング』(岩波新書)
- 大西勝也・柴田実 (2000) 「ガ行鼻音 (鼻濁音) 教育への試み—新人アナウンサー研修から—」『放送研究と調査』50-11
- 大橋純一 (2001) 「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』151
- (2007) 「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『国語論究』13 (明治書院)
- 岡崎有鄰 (1958) 「東京都内の中学生のガ行鼻音調査」『音声学会会報』96
- 尾崎喜光 (1997) 「発音—富良野・札幌継続調査から—」国立国語研究所編『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』(内部資料)
- (2006a) 「音声の使い分け (1) —これまでの調査方法でとらえてきたもの—」国立国語研究所編『方言使用の場面的多様性—鶴岡市における場面差調査から—』(内部資料)
- (2006b) 「山形県鶴岡市における『場面差調査』」国立国語研究所編『日本語科学』20 (国書刊行会)
- (2014) 「中間世代のことは」『日本語学』33-1
- 加藤正信 (1983) 「東京における年齢別音声調査」井上史雄編『<新方言>と<言葉の乱れ>に関する社会言語学的研究』(科研報告書)
- 金田一春彦 (1967) 『日本語音韻の研究』(東京堂出版) * 「8 ガ行鼻音論」
- 国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図 第 1 集』(大蔵省印刷局)
- 真田信治 (1979) 「ガ行子音—標準語のゆれ—」徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書)
- 真田信治・尾崎喜光 (1988) 「十津川方言音声のグロットグラム—ガ行子音・ダ行子音—」『待兼山論叢 日本学篇』22

- 下村泰子 (1966) 「高知県下におけるガ行子音の推移について」『高知女子大國文』 2
- 杉藤美代子 (1961) 「大阪における鼻濁音について」『音声学会会報』 107
- 高村恵子 (1993) 「栃木県鹿沼市方言におけるガ行子音の実態—ガ行鼻音の消失傾向—」『群馬県立女子大学国文学研究』 13
- 田中ゆかり・吉田健二 (1997) 「変異消失の過程とその制約—山梨県西部域若年層におけるガ行子音—」『計量国語学』 20-8
- 永田高志 (1987) 「東京におけるガ行鼻濁音の消失」『言語生活』 430 (筑摩書房)
- 中東靖恵 (1999) 「若年層話者のガ行鼻音に対する意識—近畿以西, 関東, 東北・北海道地域出身者の比較—」『岡山大学文学部紀要』 32
- (2000) 「若年層ガ行非鼻音話者のガ行鼻音に対する意識」『岡山大学言語学論叢』 7
- 中東靖恵・馬瀬良雄・Joko, Alice T. (2002) 「国内・海外の日本語教育におけるガ行鼻音の取り扱い—ガ行鼻音教育の必要性の是非をめぐって—」『岡山大学文学部紀要』 37
- 南部智史・朝日祥之・相澤正夫 (2014) 「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について—札幌と富良野の言語調査データを利用して—」『国立国語研究所論集』 7
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』 (岩波書店) * 「4. 音韻論 (1)」
- 日比谷潤子 (2002) 「言語変異の地理的差異」『音声研究』 6-3
- (2012) 「発音の変化を分析する」日比谷潤子編著『はじめて学ぶ社会言語学—ことばのバリエーションを考える 14 章—』 (ミネルヴァ書房)
- 馬瀬良雄・渡辺喜代子・清水千寿子・中東靖恵 (2004) 「現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位」『ことばと文化』 2
- 嶺田明美 (1991) 「ガ行鼻濁音について」『学苑』 617
- 森下喜一 (1977) 「語中語尾におけるガ行鼻音の衰退過程について」『野州国文学』 19
- 安栄京子 (1979) 「ガ行鼻濁音について—現代若年層の発音の実態—」『玉藻』 15
- 山田敏弘 (2013) 「いきものがかりの言語学 (1) —音声的特徴—」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 61-2